

【旧馬島家住宅 概要】 代々高遠藩の眼科医を務めた馬島家の住宅。馬島氏は、松本藩水野家に仕える眼科医であったが、水野家改易に伴い、享保12年(1727)に高遠藩主内藤頼郷に抱えられた。以来、明治4年の廃藩まで、6代にわたり眼科の御殿医として奉職している。

本住宅は本棟造りの建物で、後世の改造が少なく、建造当初(天保7年頃・1836)の形式を残しており、高遠藩の規模の大きな住宅の間取りをよく示している。県内に藩医の住宅が残る例は他になく、全国的にも珍しい極めて貴重な建造物である。



◀ **【よりつき】**

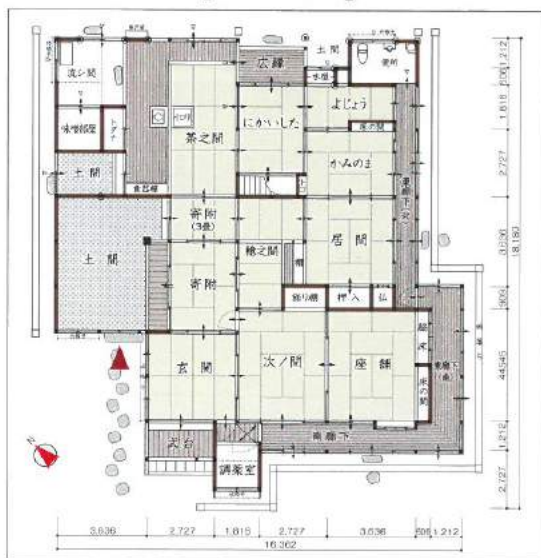
入口の土間を入ると右手が「よりつき(寄付)」となる。周囲に残る建具には、建造当初のものが残り、大変貴重である。これより南西側の各部屋が格式的な接客空間となっている。

【調薬室】▶

「しもぎしき」は「玄関」とも呼ばれた空間で、診察室にも使われた。「しもぎしき」から入った式台の脇に、調薬室を付属している点が眼科診療の為の独自の工夫であり、武士住宅とは異なる点である。



【平面図】



【高遠なつかし館 概要】

「観て・さわって・やってみる」体験的資料館である。旧馬島家を偲ぶこともできる。



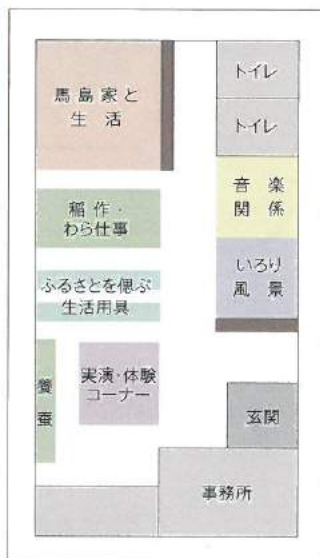
ジャクシ(貝杓子)・オタマ(汁杓子)・シャモジ(飯杓子)・等を再現し、当時の生活の様式の一部を知ることができる。

【養蚕・機織】▶

養蚕が盛んに行なわれていた頃の機織である。この機織を使って、実際に実演や体験ができる。希望者には、自分で織った品を頒布する。また、コーナーでは、機織以外に季節に合わせた体験教室を行う。例)七夕祭り、計量測定(棒ばかり等使用)、竹とんぼ、縄編み、しめ飾り等。



【平面図】



▲ **【丸千組九連窯(高遠焼)】**

高遠焼の初めは、文化10年(1813)と長い歴史があり、城内の導水用の土管を焼いたのが高遠焼の起源となっている。

丸千組は、主として製糸鍋・半月釜の製造にあたり生粉釉を万遍なく掛けたものを造った。この窯は、時の製糸業との関連のみ頼っていたため、製糸業の浮沈は忽ち窯の存否となり、昭和30年代中頃終焉を告げる。



【旧池上家 概要】

高遠城下で醤油や酢の自家醸造や販売等を営みながら、代々町の重職を務めた池上家。文禄年間(1592~1595)には、瀬戸物や小間物を商っていたと言われる。

桁行9間梁行5間の町屋造りで、板葺きの平入り住宅である。組み物が格にできている様子は飛騨高山に見られるものと類似している。旧藩時代には何度か火災にあったが、再建され、特殊な町屋造りの家屋としては町内で最も古く、所蔵されている古文書も含め、優れた文化財である。

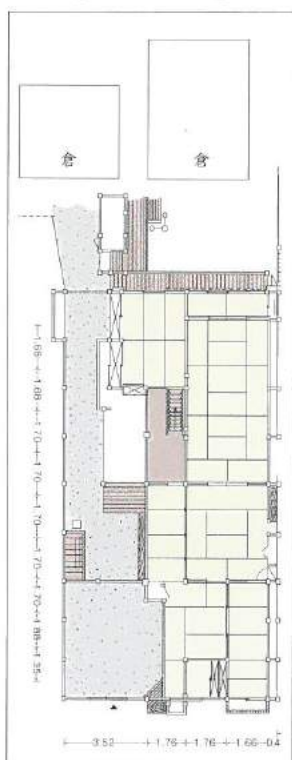


◀ **【帳場】**

客の接待や金銭収支を取りあつた帳場。座敷売形態がよく見てとれ、帳場には格子の囲や長火ばち、銭箱などが置かれ、商家の雰囲気を残している。



【平面図】



▲▼ **【勝手】**

屋号㊦(マルチョウ)を染め抜いたのれんの奥に、囲炉裏を設けた昔ながらの様子を再現。

古くから使われていた水がめや膳椀もそろっている。また、静岡の秋葉神社で同家が宝物を公開した際の開帳札が掲げられており、「女人参詣許す」とある。

